

横浜国大土木同窓会 40 周年記念

寄稿文集



2022 年 3 月

横浜国大土木同窓会

～～～～～

横浜国立大学土木同窓会 40周年記念

～～～～～

まえがき：

1982年3月26日に発足した横浜国立大学土木同窓会は、今年創立40周年を迎えました。それを記念し、同窓会会長諮問の40周年記念WGが記念紀行文集の作成を企画し、発刊の運びとなりました。

本記念誌は、同窓会創立40周年という記念としての記録を残すこと、今後も継続していく横浜国大都市科学部都市基盤学科とその卒業生からなる同窓会のさらなる発展に寄与するために企画いたしました。

本趣旨にご賛同いただき、お寄せいただきました方々に感謝いたします。



発足時の記念写真（第1期卒業式後）

横浜国立大学土木同窓会 40 周年記念誌によせて

横浜国立大学土木同窓会
会長 松丸 亮（第 5 期卒業）

横浜国立大学土木同窓会は、2022 年に設立 40 周年を迎えました。

横浜国立大学土木同窓会では、同窓会設立 40 周年をこれまでの 10 周年とは異なった特別なものとしてとらえていました。つまり、1 期生が大学を卒業してから 40 年というのは、横浜国大土木の礎を築いた多くの先輩方が 60 歳という節目の年を越え、いわゆる第一線から退く時期であるため、同窓会の歴史としても一つの節目と捉えていたからです。

その節目となる 40 周年に向けて、同窓会執行部は、40 周年記念同窓会総会、総会に付随する形での講演会、記念誌の出版、現役学生支援のための寄附の募集などを計画していました。しかしながら、2019 年末からの新型コロナウイルス感染症の感染拡大は、このような記念事業にも大きく影響をし、多くの企画の実施をあきらめざるを得ませんでした。

そのような中、オンライン発行となり執筆者も限られてはいるものの、40 周年記念誌をまとめることができたことは、会長としてうれしい限りです。

記念誌に寄稿をいただいた、先生方、同窓会会員の皆様に感謝をいたします。また、お忙しい中、記念誌の企画から編集までご尽力をいただいた、片桐元会長に謝意を表します。

令和 5（2023）年 3 月



井上初代土木同窓会会長による植樹式

目 次

まえがき	i
横浜国立大学土木同窓会 40 周年記念誌によせて	ii

寄 稿 文

1. 横浜国立大学に土木工学科が発足した経緯と同窓会への期待	池田尚治（特）
2. 同窓会創立 40 年によせて	猪股昭彦（3 期）
3. 人生 60 年，還暦に向けて思うこと	小野寺修一（4 期）
4. 縁（えん）；横浜国大土木同窓会 40 周年によせて	片桐雅明（2 期）
5. 今振り返ってみて思うこと	小長井一男（特）
6. 人を想う	小松怜史（27 期）
7. 若手教員としての横浜国大時代の活動と思い出	佐々木淳（特）
8. 創立 40 年によせて	佐藤慎司（特）
9. 横浜国立大学勤務の思い出	柴山知也（特）
10. 国大土木に世話になり続けた 30 年	松丸 亮（5 期）
11. 横浜国大同窓会 40 周年に想う	宮田利雄（特）
12. 開発援助とバン格拉デッシュ	吉原俊治（5 期）
13. 土木同窓会創立時当時の思い出	渡部茂樹（1 期）

（あいうえお順）

あとがき

横浜国立大学に土木工学科が発足した経緯と同窓会への期待

池田尚治*

1. プロローグ

40年前の1982年3月、第1期生の卒業証書授与式が土木工学棟2階の製図室で緊張感を持って整然と執り行われた。卒業する約40名の名前を1人ずつ呼んでは卒業証書をそれぞれに授与したとき、ゼロから学科を立ち上げ、独自にカリキュラムを設定して卒業要件を定め国立大学の卒業資格を与えることができたことに深く感動したことを今でも鮮明に記憶している。

2. 新学科の創設

土木工学科の創設は1期生卒業の4年前の1978年4月で、建築学科の支援の下に学年進行の形で最初の第1講座が誕生し井上孝教授、大蔵泉助教授が就任した。当時は建築学科の狭いコピー室を借りて居場所が確保された。翌年には第2講座として池田(教授)と今井五郎助教授が就任したが居場所は共通教室の大部屋を借用して菊池事務官を含め全員が一室で過ごした。非常勤講師の先生達の講義も始まってきた。3年目には宮田利雄教授、椿龍哉講師が就任し、この年に土木工学棟や実験棟が完成して新築の建物に晴れて居を構えることができたのである。1期生は3年生となって待ちに待った新設の実験室で土木の学生実験が始まった。4年目には三木五三郎教授、磯部雅彦講師が着任し4講座、学生定員40名の学科が完成したのであり年度末には最初の卒業論文審査会が行われた。第1期生たちは卒業に際し、桜の苗木を建物の周囲に記念植樹した。これが40年後の現在の桜の大木群に育ったのである。当時は過激派による学生運動が盛んで、正門前は常に機動隊がバリケートを置いて警護をしていた。また、大学としての卒業式も学生運動の関係で実施されず今から思えば隔世の感がある。

土木工学科の建物の設計者は建築学科の山田弘康先生であり、原案に対して外観も含め我々の要望を種々お願いして現在の建物が実現したのである。建物の施工者は(株)鴻池組であった。基礎構造はPC杭で支持層は強固な土丹層である。敷地は移転した名門の程ヶ谷カントリークラブの跡地である。

土木工学科設立に際しては研究教育用の設備費として1講座あたり1千万円、合計で4千万円の予算が

学年進行とともに配付された。測量実習用の機器、材料強度試験機、水理実験用水槽、机、書架などの備品類をはじめとして一流大学としての教育研究上必要な最低限の設備をゼロから整えるために苦勞した。

土木工学科を有する国立大学として関東近辺では東大、山梨大、信州大があったが1964年に東京工業大に土木工学科が新設され、引き続いて新潟大、埼玉大、筑波大、長岡技術科学大、豊橋技術科学大に土木系の学科が新設された。横浜国大はその後であった。列島改造の波に乗って茨城大、群馬大、宇都宮大、などに土木系学科がその後を追って誕生した。

横浜国大の土木工学科の設立に際しては当初、東大の福岡正己教授が中心となって新設の申請が行われたが発足に際しては建築学科の教授の意向が配慮されて急遽、井上孝教授が赴任することとなり、就任する教員も当初の申請時の陣容から相当に変更された。

3. 卒業生の活躍

講座の増設、大講座制への移行、博士課程の新設など教室運営の苦勞は大きかったが今や本学の土木工学部門が立派に成長しその役割を確固として果たしていることは誠に悦ばしいことである。また、卒業生が各界で大いに信頼され活躍していることは何よりも嬉しいことであり、多くの工事現場や技術検討委員会で卒業生の活躍振りを目にしてきた。わが国で初めて土木工学出身者が建設系の大臣になったのが馬淵澄夫3期生で2010年に国土交通大臣に就任した。激励のために大臣室を訪問した時の写真1、2を示す。



写真1 馬淵国土交通大臣との記念撮影、後列右側は小堀勝弘3期生、左側は筆者 2010.12

*IKEDA Shoji, 1979年4月—2002年3月: 横浜国立大学教授, 2002年4月: 同名誉教授



写真2 大臣室でアダム スミスを説明 2010.12



写真3 橋本幹司技師長と利賀ダム庄川橋 2017.11



写真4 宮野一也部長と八十里越PC橋 2019.1



写真5 矢野一正所長と新東名河内川橋 2021.12

馬淵大臣は「コンクリートから人へ」の民主党政権の時代の中で事業続行が危ぶまれていた八ッ場（ヤンバ）ダムの工事を軌道に乗せるとともに、福島原発事故の処理に大きく貢献し、社会で高く評価されている。

これまでに多くの卒業生と業務上で遭遇する機会を持った。海外での会議や業務も含め卒業生の活躍振りに接する度に心に深く感じるものがあった。ここでは比較的最近の例を示す。写真3は三菱重工の橋梁部門であるエム・エムブリッジの橋本幹司3期生と富山県秘境の現場を調査した時の情景である。写真4は新潟県境へ同行した安藤ハザマの宮野一也5期生との現場写真、および写真5は神奈川県奥の山奥での鹿島建設の矢野一正7期生との現場写真である。

4. 同窓会への期待

会則では「会員相互の親睦を深め、その動静を明らかにし、母校の発展に寄与する」との趣旨である。すなわち、あくまでプライベートな親睦団体であってクラス会の拡大したものと考えられる。会員は会費を支払って新しい名簿と会報を入手する。また Web で情報を得ることができる。年1回の総会に出席し懇親を深めることもできるし親睦のほかに教室の動向を知ることにもできる。別の言葉で言えばファミリー的、パルチザン的な団体なのである。しかしながら教室が実質的に関与している以上、完全に私的な存在とは言えない側面がある。筆者は本同窓会以外に母校である東大とコロンビア大学、職歴としての東京都立大の同窓会に属しているがそれぞれに特徴があり、同窓会の意義と役割があると感じている。特にコロンビア大学の大学全体の同窓会報には興味ある情報や論壇が散見される。東大などの旧帝大系大学には伝統的な「学士会」があり、会報である学士会報には種々の分野の最新情報が載り、貴重な情報源となっている。本同窓会は創設40周年を迎え、ようやく会員構成が一人前になったのであり、ここで改めて会の体制と運営方針を詳細に検討するのが良いと思われる。この際、ほかの大学の同窓会の運営状況を調査することも必要と思われる。筆者の個人的な感じでは、卒業生が組織する団体ではあるが事務局は教室に頼らざるを得ないので教室主任か長老教授が会長となるのが適切であると思われる。また、同窓会の中に運営委員会を設置して委員長に責任ある卒業生が就任するのが良いと考えられる。同窓会が学生を表彰するシステムも越権行為の感が否めない。同窓会は同窓生相互、教室との情報交換、知的交流に徹することが第一と考えられる。

5. エピローグ

5年前の2017年には筆者の瑞宝中授章叙勲を祝して土木教室主催の叙勲記念シンポジウムと着席の晩餐会が本会の会員を含め200名以上の臨席者のもとに開催された。「防災と教育に関する叙勲記念シンポジウム論文集」を印刷配布できたことは大いなる喜びであった。これも本会会員を中心とした関係各位のご尽力のおかげであり、ここに改めて謝意を表したい。

同窓会創立40年によせて

猪股 昭彦*

3期生の私にとって同窓会創立40年は、卒業・就職してから退職を迎えるのとはほぼ同じ期間であり、同窓会の歩みと自身が社会人として歩んできた日々と重なり、いろいろなことを思い出します。

卒業先が公務員だから、民間と違って東京や横浜から遠く離れたところに異動することもないだろうという理由で学年幹事を任せられ、同窓会に係わるようになりました。リモートでの会議など思いもよらない頃です。同窓会最大のイベントは年に一度の総会+懇親会。会場はホテルの宴会場が主でしたが、大学内で開催したこともありました。

卒業生の数も増えた十数年前からは、同窓生間の懇親だけでなく情報発信型の総会に転換し、卒業間もない同窓生も参加しやすいよう公共の施設で開催する形に見直し、現在に至っています。

末尾が同じ期の同窓生による跨期講座や在学生を対象にした業種別の懇談会、同窓会による学生表彰など、活動の幅も広がりました。

ところが、一昨年（令和2年）初頭から広がったコロナ禍により、2年間にわたり総会は開催を断念せざるを得ない状況でした。けれども今年はリモート形式で開催し、40年を祝うことができました。

お忙しい日常のなかで、企画立案から実施までご尽力された方々には、頭が下がります。私は今再任用職員として仕事を続けていますが、そう長くはないでしょう。でも、それから先も、何らかの形で同窓会を支援していければと思っています。

大島など島嶼部と東京の調布飛行場とを結ぶ小型旅客機に乗れば、空から国大を望めます。私が在学中はまだ若木だった樹木が、学内の通路を覆い隠すまでに成長しています。建築物もずいぶん増えているのを見ると、なつかしさと歳月の流れの速さを感じます。

土木同窓会が、これからも益々発展し、縁のある皆様の拠り所となることを願っています。ありがとうございました。

↓国大上空から 2018年10月撮影



*INOMATAAkihiko, 3期(1984.3卒), 交通・計画研究室, 東京都

人生 60 年、還暦に向けて思うこと

(執筆者名) 小野寺 修一*

同窓会メンバー及び関係者の皆様、同窓会創立 40 周年おめでとうございます。人生 60 年、波乱万丈の人生を送って参りました。これらを振り返り、気の向くままに私の人生を振り返りたいと思います。

◆ ゼネコン東京支店在籍時代

大学院を終了した私は、大成建設に入社しました。半年ほど本社の土木設計室に研修した後、東京支店に配属されました。東京支店では半蔵門線九段下駅・半蔵門駅間新設工事、銀座線改良工事(溜池山王駅)、都営地下鉄大江戸線都庁前駅新設工事等を歴任しました。正に都市土木の最たる現場を経験してきた訳です。

1980 年代のドリンク剤「リゲイン」のキャッチコピー「24 時間戦えますか?」ではありませんが、24 時間勤務後夜勤明けに定時迄働く”3 連勤”は当たり前で、ある日、私の夜勤明けに新人の歓迎会があり、その帰宅時に東海道線の快速大垣行き(23 時頃東京発)に乗車したところ、横浜駅で降りるはずが静岡駅まで寝過ごし 3 時頃慌てて下車、改札階のベンチで仮眠し、そのまま上り始発で出勤した記憶があります。

また当時はバブル華やかかなりし時代で、建設業は 3K と呼ばれていました。測量は土木担当の現場業務であり、私たちが測量をしていた所を通りかかった母子の母親が「あんな風になってはダメよ」と私に聞こえるように言っていた事が今でも忘れられません。

◆ ゼネコン関西支店在籍時代

弊社では 5 年次・10 年次転勤が制度化されていた為、10 年次転勤で大阪(現関西)支店に転勤しました。そこでいくつかの現場を経験しましたが、その中で支店設計室での設計研修が行われました。その試験の成績が現場職員トップであった事もあり設計室配属となりました。この経験がシンガポールでの現在に影響を与える事になるとは思いもしませんでした。

数年後現場配属となり、その中で国交省 26 号浪速共同溝、近鉄長野線交差化立体工事に赴任し、“大阪人”の気質を理解する事が出来ました。大阪人は、外部の人間に対する排他的意識が非常に強い為、なかなか部外者を認めないのですが、一旦認められると非常に居心地が良い。私にとって大阪は大都市ではなく「大きな村」だったのです。

◆ 初めての海外赴任

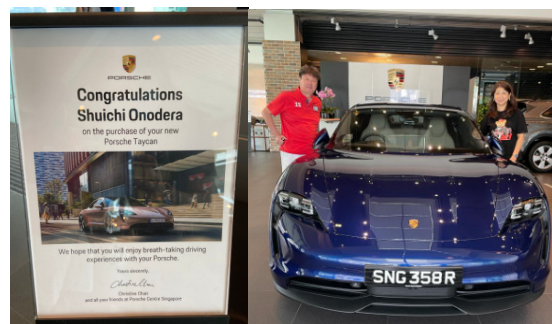
先述の通り、弊社のシステムでは 5 年・10 年の転勤以外は公にされておらず、このままでは大阪で骨を埋める事になってしまうと危惧した私は、2004 年に海外に転機を求めました(当時海外勤務帰国者は優先的に次の転勤先をアピールする事が出来た)。私は英語が大の苦手でしたが、シンガポールの地が私を試練・飛翔に導いてくれました。赴任した頃は、全く Communication が出来ませんでしたが、ある Civil Engineer の計らいで English to Easy English の Translate に成功します。これがシンガポールでのスキルを向上させる鍵となりました。

◆ 私の人生を変えたシンガポール

日本では、私は建設業界の top にいた為、下請は私の指示に従順に従っていました。私はそれが私の実力と誤解していましたが、Singapore では本人の実力がすべて、企業より個人の実力がすべてであったのです。私は強烈なカルチャーショックを受けましたが、そこから立ち上がろうと努力し、2007 年に日本人 2 人目の Professional Engineer を取得しました。現在は日本人唯一の Certificate holder です。日本での設計業務の経験もあり、Design Firm をスタート出来ました。その後地元の有力なパートナーと出会い、現在に至っています。現在まで多くの企業を起こすことが出来ました(5 Company の Share Holder)。

◆ 今後の人生

2004 年当時は、1S\$=¥64 程度でしたが、現在は 1S\$=¥100 程度にまで上昇しています。人生 60 年という節目に当たり、存命の限り当地でのビジネスに邁進して行きたいと考えています。



2 台目の Porsche (Porsche Taycan)

*ONODERA Shuichi, 04 期 (1987.3 院修), 土質研究室, 横浜国立大学大学院計画建設学

縁(えん)；横浜国大土木同窓会40周年によせて

片桐 雅明*

今から約40年前、千葉の銚子から、横浜国大工学部土木工学科に入学するため横浜に出てきた。前年に土木工学科が設立され、この縁で全国から41名が同期生となった。1期生が設立した土木同窓会に、我々2期生は、1983年3月に入会した。大学院に進学し、その後、工学部助手として、土木工学教室に勤務したことから、同窓会の運営に携わり、副会長、会長の席を務めた。40周年を迎え、私的ではあるが、同窓会の目的の1つのある「人との縁」を振り返ってみる。

<大学・大学院時代>

たまたまではあろうが、横浜国立大学工学部土木工学科を受験し合格した、北は秋田から南は九州までの全国から集まった、41名が1979年4月10日に対面した。先生方は、井上孝先生、大蔵泉先生、池田尚治先生、今井五郎先生の4名、先輩方は1学年上の41名(学籍上)という小組織であった。

本格的な専門は2年生から始まり、実際に行われている工事や調査など、非常勤の先生方の講義も組み込まれていた。3年後期の安田進先生(当時：基礎地盤コンサルタンツ)の講義は、木曜日の1限であったが、授業開始前に先生と雑談するのが楽しみで、10分前には入室していたことを思い出される。その後も、先生とは学会その他でもお世話になり、最近では、雑誌「基礎工」のご執筆も頻繁に依頼しています。

大学院では、龍岡文夫先生(当時：東大生研)の講義も受講した。龍岡先生には、数年後、学位の主査をお引き受けいただいた。また、「基礎工」の龍岡編集委員長から、編集委員会への参画、ご推薦いただいた。

<助手から留学>

博士課程に進学しようとしたが、縁あって横浜国立大学工学部助手となった。今井先生のかばん持ちで、いろいろな会議に参加し、著名な先生方とお会いした。初めて国際会議に出席したのは、1987年に京都で開催されたアジア地域会議であった。この時には、京大の太田先生の研究室にもお邪魔し、その時の研究室の学生さんと交流した。その中のおひとり、後日、道路公団の技術会議で責任ある立場で議論もした。また、この会議には岸田信子も参加しており、バンケットに参加していた舞妓さんたちを別角度から眺めていたことが後でわかり、大いに盛り上がった。

家内となる岸田信子は、三木五三郎先生からご紹介いただいた。また、西オーストラリア大学(UWA)への留学は義父の紹介であった。マーク・ランドルフ教授、マルティン・ファフィ先生など、新たなネットワークが出来上がった。特に、同室のダグ・スチュアートとは家族付き合いもあり、ダグが留学したUCデービスに訪問した時には、彼の超大型遠心模型実験装置を使った研究だけでなく、多くの研究者も紹介してくれた。

<日建設計中瀬研究室から今まで>

UWAでの研究は、遠心模型実験を使った「突発的な液化化挙動」であった。そのこともあって、新たに遠心模型装置を整備した日建設計中瀬土質研究室に入社した。そこでは、東京電力、JR東日本、国土交通省九州地方整備局からの業務を主に行った。

九州地整の新北九州空港整備事業の業務では、今井先生の専門である浚渫粘土の埋立予測を行う必要があり、先生の理論をベースにプログラムを開発し、地盤特性を設定するための実験方法を確立し、実際の挙動を再現するための修正方法を構築した。この事業では、予測や評価結果をご審議いただく有識者委員会が立ち上げられ、今井先生にはそのメンバーに加わっていただき、粘土の埋立解析結果をご審議いただいた。

地盤工学会、土木学会でも、多くの方々と一緒に学会誌や用語辞典などを編集し、全国大会やシンポジウムの裏方にも携わった。この時に知り合った方々とのネットワークも出来上がり、いま取り組んでいる「基礎工」の編集にご協力いただいている。

<この40年を振り返って>

大学入学から現在まで、ざっと振り返ってきた。これを概観すると、多くの方々に支えられて充実できた半生と思われる。その要因は多くの方々と知り合える機会があり、たまたまかもしれないが、その方と知りあえたことから始まったと痛感する。

先に述べたように、大学のクラスは同じ環境で学んできた学生の集まりで、そのクラスの集合体が「同窓会」であり、世代を超えた学生の集まりとなる。そのため、世代を超えた方々と気軽に知り合いになれる場としては貴重な場である。人的ネットワークを広げるなど、より豊かな人生を送るための方法として、同窓会を活用するのも一案ではないだろうか。

*KATAGIRI Masaaki, 2期(1983.3卒)、地盤研究室、日建設計

今振り返ってみて思うこと

小長井 一男*

絵本作家かこさとしさんが、自身の戦争体験を綴った紙芝居を描き残していたことを8月15日朝のNHKおはよう日本で見た。青空を背景に、B29に飛行機で体当たりした特攻の様子とそれを見上げる人々が描かれていた。そこから落下傘をつけて落ちていく兵士。その落下傘は開かない。かこさとしさんがどんな思いでこの絵を残したのかは私には知る由もない。かこさんが戦後最初に手掛けた絵本は『だむのおじさんたち』一般には『カラスのパンやさん』などユーモラスな絵本で知られるかこさんだが、自身、工学博士の学位を持ち、土木にまつわる絵本も少なくなく、戦争の後によりやく訪れた人々の平和な生活への槌音を素直に喜ぶ気持ちがあったのだと思う。

かこさんの作品に『暮らしを守り工事をを行ったお坊さんたち』なる絵本がある。行基、良弁、重源、空海から江戸時代の鞭牛に至るまで土木技術者であった僧侶の利他行の実践を描いた絵本である。行基が活躍した奈良時代には、仏教の民衆への布教活動が固く禁じられていたが、行基はその禁を破り、畿内を中心に困窮者のための布施小屋九所、道場や寺院四十九院、溜池十五、溝と堀九筋、架橋六所などの社会事業を成し遂げていった。行基の土木技術は、その師である道昭譲りとされる。道昭は653年に遣唐使として入唐し、「西遊記」の实在のモデルである三蔵法師玄奘から大乘仏教の利他行を学んだ。当時の仏教寺院は祈りの道場というだけでなく、土木、医学、薬学、天文学など最先端の科学技術とセットの総合大学であったのだろう。幾多の人々の生涯を見守る中で見出した人の心の安寧への真理を、最先端の科学技術を方便として具現化する道場であり、だからこそ権力者も帰依して大きな支援もあったのだと思う。

今の高等教育の道場である大学に長年勤めていた自分の経験を振り返ってみると、予算も人員も慢性的と言っていいほど漸減が続いてきた。私が横浜国大を退職する2018年には、欧米やアジアの主要国の研究開発費に占める政府負担割合は軒並み二割を超えているのに、日本は14.5%ほど。私が現在編集のお手伝いをしている英文誌で担当する論文の7割から8割は中国やインドから。日本からの投稿が圧倒的に少な

くなっている状況は心底心配である。大学は少ない予算で多くを要求され、教員ばかりでなく学生も忙しい。宗教や哲学の語るところを深く思索し、人生を語り合うような時間はなかったと思う。行基が生きていたら今の大学のありさまや、物議をかもした官邸と学術会議のぎくしゃくした関係をどんな思いで見られるだろう。

新しい学問領域が次々に生まれ、それを反映して組織や学位の名称も進化していくことは、自然な流れだろう。しかしながら忙しい大学にあって複雑な思いもある。「大学設置基準の大綱化」として知られる1991年の制度改革により、日本の学位の表記方法は大きく変化した。それ以前は理学士、農学士、文学士、工学士など、様々な分野で分かれていた名称を、学士、修士、博士として一本化し、それでも「各学生がどのような分野を履修したのかを明示することは依然として社会的に有用である」として、括弧書きで学士（理学）、修士（農学）、博士（工学）などと表記することになった。カッコ内に付記する専攻分野の名称は今では七百種類に達し、かつそのうち六割以上が一つの大学でしか用いられないという実態になっているようである。幸い私たちは（工学）と大きい括りの中にいるようであるが、しかし700にも達するカッコ書きの専門分野を名刺に印刷し、感染症の蔓延や、ロシアのウクライナ侵攻、止まらない温暖化、発言力を増す第三世界など様々な課題が顕在化しつつある国際社会とどう向き合っていくのだろうか。数十や百を超えるようなカッコ書きの分野を跨ぐ問題を広い視野で議論できる、あるいはしなければならないのが“土木”であり、私たちにはその自負がある。

私の横浜国立大学時代は5年と短い。しかしその間に教室主任として同窓会の事務局長、また退職前の1年は就職担当も仰せつかり、土木同窓会の活躍ぶりに目を見張った。とはいえ、就職支援や学生の表彰ばかりでなく、大学（教員＋学生）、そして同窓の社会人の方々と、今、それぞれの立ち位置でそれぞれが直面する課題を語り合う場がもっと増えてもいいのではと思う。期待するところは大きいのである。

*KONAGAI Kazuo, 2013年4月～2018年3月：横浜国立大学教授（地盤研究室）

人を想う

(執筆者名) 小松 怜史*

この度は、横浜国立大学土木同窓会が40年の節目を迎えられましたことを心よりお祝い申し上げます。

私が大学で教鞭を執ったのは2014～2019年の5年ほどでした。博士課程修了後に母校である横浜国立大学の土木教室で教員となる機会に恵まれました。学生と年齢が近かったことから、教員ではありますが兄貴のような近しく頼られる存在でありたいと願っていました。心身共に余裕はなく、日々を必死に過ごしていたのが思い出されます。

教員として働いていた当時、春は至福の一時でした。多くの時間を過ごした土木棟2Fは、ちょうど桜の木と同じ高さにあります。窓がまるで額縁の役割を果たし、一面に桜の花が描かれたような景色を臨むことが出来ました。夜は街灯の灯りに桜の花が照らされることから、一人の時は居室の電気を落とし、夜桜を居室にしながら満喫していました。土木棟の周囲に植えられている桜の木々は、卒業生が植樹されたと伺っています(写真1)。きっと、後輩たちのことを想ってのことだったのでしょう。私も先輩たちに倣い、退職時に土木棟横の畑にチューリップの球根をこっそりと植えました。今でも毎年、小さくはありますがチューリップがひっそりと咲いていると噂で聞きました。後輩たちの癒しとなっていれば嬉しいものです。

話は変わりますが、転職した2019年の冬、第一子が誕生しました。すぐにコロナ禍となり、在宅ワークが始まりました。また、今年の夏には第二子が生まれ、現在は育休をいただき、家事・育児中心の日々をおくっています(写真2)。いずれの子とも、生まれた直後から多くの時間を共有できたことは幸せなことです。仕事はもちろん大変ですが、育児は、自分の思い通りのペースで進まないことの方が多く、仕事よりも過酷だと感じる場面も多々あります。

そんな悪戦苦闘している日々の中で、子供の言動を観察して思ったのは、「子供の立場でものを考える」ということの大切さでした。子供が何らかの理由で癇癪を起すのは、子供が伝えるすべを身に着けていないからであり、子供にきちんと説明もせず大人の価値観を押し付け強制しても、何の解決にもならないということです。頭ごなしに否定しても、その場は何とかなる



写真1 土木棟周辺に咲き誇る桜の花



写真2 育児に奮闘する筆者

かもしれませんが、子供は言動を否定された理由(社会的な慣習)が理解できていないので、親の顔色を伺う子供に成長してしまうようになるようになりました。時間をかけて子供と話をすれば、大抵のことは解決できることが次第に分かってきました。子供の立場に立って考え、共感し、一緒に解決策を見出すという過程を繰り返すことで、自発的に物事を考え、判断し、実行できるようになるのだと思います。己に余裕がないと、なかなか実践が難しいのですが、努めて行動したいと思っています。

何ともしとめのない話になってしまいましたが、「人を想う」ということで、実体験や個人的な考えを綴らせていただきました。コロナの収束が見えない状況ですが、人に対する想いは、いつの時代も密でありたいものです。

*KOMATSU Satoshi, 27期(2004.3卒), 研究教員・助教(2014.3～2019.3) コンクリート研究室

若手教員としての横浜国大時代の活動と思い出

佐々木 淳*

創立40周年誠におめでとうございます。私は2002年4月(9月までは兼任)から2013年3月までの11年間、第2分野の教員としてお世話になりました。前任地は土木教室元教員でもある磯部雅彦先生がご尽力され、1999年4月に設立された環境学の創成を謳う独立大学院専攻で、私もその一員として土木の水工分野から沿岸環境学という新しい分野の開拓を目指していたところでした。そのころ、横国はハード重視の土木の本流とあってよい教室で、私の研究に関わる実験設備も無かったのですが、上司の柴山知也先生から環境分野を開拓するよう励まされ、当時としては珍しく若手ながら実質PIとして活動させて頂きました。

前任地では広い分野の学生を対象に新たな展開を模索する、フワっとした内容の講義をしていたことと比べると、流れの力学といった水理系の伝統的科目の講義を初めて担当する等、若手教員にとって自身の基礎力や教育力を身につけるととても良い機会と感じました。水理は演習や実験とセットになった手厚いカリキュラム構成でしたが、内容は取っ付きにくく、何に役に立つのか分かりにくいこともあって、苦手な学生さんが多かったのではないかと思います。私もオイラーの方法など、水理の独特の考え方を理解するのに学生時代苦労したので、年を重ねる毎に少しずつ工夫し、時々反応のよい学生さんが現れるのが楽しみでした。

土木教室では当時から国費留学生特別配置のプログラムを運営しており、優秀な博士課程の学生さんが来てくれることは大きな魅力でした。赴任後さっそく博士の留学生を受け入れることになり、在籍中に7名の博士学生を指導する機会に恵まれました。一方、世界銀行の支援で社会科学系の教室と共同運営していた通称世銀プログラムでは、母国で行政を担っている土木分野以外の留学生の指導にも関わり、現在の私の研究にも繋がる、文理融合的な地域のサステナビリティへの貢献を目指す研究へと幅を拡げることができました。

赴任した当時はまだ文科省の国立大学で、文部科学教官の国家公務員でした。辞令を見ると、国立大学の東京支店から横浜支店に配置換えになったようなもので、校費(現在の運営費です)や研究環境も大きな

違いは感じられませんでした。まもなくすると国立大学は法人化され、いわゆる競争的環境下でCOEプログラム等、大学間や部局間に大きな格差がもたらされるようになりました。土木教室は規模が小さく、他の工学系の専攻に比べると国際雑誌論文数や獲得研究費等で見劣りし、教授会では研究院長から専攻間の実績を比較した棒グラフが示されたことは衝撃的でした。当時の教室会議ではときどき重苦しい雰囲気になりつつも、毎週活発な議論がなされていたことを思い出します。また、毎月のように教員の懇親会が開かれ、お酒の勢いもあってとても活発な議論の下、横浜の魅力を前面に出し、都市基盤や都市イノベーションへと昇華していく取り組みはチャレンジングでした。私の在任中の後半は理工学部や都市イノベーション研究院の創設といった改組に関わり、当時はかなり疲弊していたような気もしますが、今となってはよい思い出です。

研究室での活動では、今思うと大変贅沢なことに、多数の学生さんが毎年研究室に配属されました。私の力不足もあって環境系のテーマにはその有用性が分かりにくいものも多く、あまり人気はなかったようですが、学生さんと一緒に船に乗って観測したり、計算機と格闘していました。また、当時はこの研究室でもそうでしたが、夏の研究室旅行、冬の研究室スキーと、毎年のイベントでは研究に取り組むときはまた違った学生さんの成長に触れることができました。ちょうど我が家の子供が小さかったこともあり、家族での参加にも恵まれました。

2013年4月に約10年ぶりに現在の職場に戻り、専攻の雰囲気も学生さんのタイプも全く異なる環境で、あっという間に10年近くが過ぎました。横国時代から取り組んできた沿岸環境研究では、気候変動の緩和・適応の文脈でブルーカーボンがホットなテーマとなっています。また、コロナ禍や国際情勢の緊迫化からも身近な地域の環境や資源(憩いの場や水産資源)の重要性を改めて認識させられるようになりました。安全で美しく豊かな沿岸域の再生と創出に同窓会のみなさまと協働して取り組めるのを楽しみにしていますので、お気軽にお声がけ頂ければ幸いです。

*SASAKI Jun, 元准教授・教授(2002.4-2013.3), 第2分野水環境研究室, 横浜国立大学土木工学教室

創立40年によせて

佐藤 慎司*

横浜国立大学土木同窓会が創立40周年を迎え、たいへん喜ばしく、また、その輝かしい歴史の一部に微力ながら貢献できたことを、元教員として、誇らしく感じています。私は、1987年から1994年までの7年間、助手および助教授として教育と研究に携わらせていただきました。授業では数学の講義を担当し、微分方程式や関数論を教えたので、当時の学生の皆さんにとっては、数学の教員と思われているかもしれません。

赴任当時は、常盤台公園の近くのアパートを間借りし、結婚してからは野毛山の宿舎で生活しました。どちらも急な坂の上にあり、どこかに行くにも帰るにも、坂の昇り降りをしなければなりません。その後、つくば、柏、高知と引っ越しましたが、横浜は坂の多さと人の多さが強く印象に残っています。

1994年に土木研究所、1999年に東京大学に転任してからも、卒業生とは折に触れてお会いすることが多く、元気で活躍する姿を頼もしく見ています。コロナ感染症が拡大する前には、卒業30年の集まりに呼んでいただ

いたこともあり、さまざまな分野での活躍を聞かせていただき、時間の重みを改めて感じた次第です。

感染症拡大に伴う行動制限が長期化し、同窓会活動も新しいスタイルの模索が求められています。ウェブ会議ツールなどはかなり浸透しましたが、やはり同窓会など、リアルな場の共有が本質的となるものには、仮想〇〇では代替できないものがあります。今の私もそうですが、地方で人とのつながりが薄い環境にある者にとっては、同窓会のような人のつながりが極めて重要なように思います。少ない人数でも良いので、実際の時間や空間を共有した仲間と話す時間は、他のものでは代替できません。

卒業生が全国で活躍するようになると、地方在住者が相対的に多くなる若手層へのケアが特に大切になると思います。これらを通じて、世代や職域を超えたコミュニケーションを進め、人生の勇気を共有する新たなつながりを生みだすことが同窓会の本来の役割です。横浜国立大学、土木工学教室、同窓会のますますのご発展をお祈り申し上げます。

*SATO Shinji, 元教員 (1987~1994), 水理研究室, 現在 高知工科大学システム工学群

横浜国立大学勤務の思い出

柴山 知也*

私は昭和62年4月に横浜国立大学助教授に配置替えとなって赴任し、平成9年8月に同教授に昇任しています。その後、平成21年4月に早稲田大学教授に転任したため、横浜国立大学における勤務は22年間ということになります。学科の創立44周年、同窓会創立40周年ですので、その半ばを教員として過ごしたことになります。この間、水理研究室において、私が指導を務め、学位を取得した方は、博士20名（内論文博士5名）、修士約60名、学士約85名に及んでいます。私の大学教員としての勤務は東京大学6年、横浜国立大学22年、早稲田大学15年となりますので、教員人生の概ね半分を横浜国大で勤務したことになります。

この間、故合田良実名誉教授、佐藤慎司助教授、岡安章夫助教授、佐々木淳准教授、片山裕之助手、島谷学助手、高木泰士助手、鈴木崇之特任教員（職名は当時）の皆様と協力して水理研究室を運営しました。

その後、研究室の卒業生の中から、高木泰士博士（東京工業大学准教授）、鈴木崇之博士（横浜国立大学教授）、松丸亮博士（東洋大学教授）、Ioan Nistor 博士（オタワ大学教授）、Mohsen Soltanpour 博士（K.N. Toorsi 工科大学教授）、Joel Nobert 博士（ダルエスサラーム大学准教授）、Miguel Esteban 博士（早稲田大学教授）、Nguyen Dhang Thao 博士（ホチミン市工科大学副学長）、Cheki Dorji 博士（ブータン王立大学工学部長）など、学会を支え、国際的に活躍する多くの人材を輩出できたことも楽しかった思い出として残っています。

さて、横浜国大における私の最大の学務活動は留学生教育システムの育成だったと思います。横浜国立大学赴任以来、最優秀層の工学系留学生の流れを欧米諸国から日本へ転回させ、優秀な留学生を教育するシステムを作り上げることに一貫して努力しました。私の工学系留学生教育推進のための横浜国立大学における最初の仕事は、「横浜国立大学・計画建設学留学生特別コース（その後、国際基盤工学特別プログラム）」の設置と運営でした。同コースは、平成元年に当時の文部省学術国際局留学生課の認可を得て発足しましたが、国費留学生の枠を持ち、博士課程後期の教育を英

語で行う点に特徴がありました。私は、昭和63年にコース案の作成と文部省との交渉を行い、コースの骨格を作りました。単身で文部省の留学生課を訪問し、先方の係長と交渉し、担当の課長補佐に紹介されたことを覚えています。その後、コース発足後から私が転任するまで、プログラムの責任者（Foreign Student Officer）を20年以上にわたって勤めました。留学生の大学への入学願書は日本語での記入が必要なため、私が代筆しましたので一人一人をよく覚えており、今でも当時の入学者達の氏名はアルファベットで正確に記述することができます。当初はインターネットがなかったので、大学で奨学金給付を決定した留学志願者宛ての書類を入れた手紙を作成し、帰宅途中に横浜駅東口の横浜中央郵便局から発送していたことを覚えています。現在では多くの卒業生がそれぞれの母国で大学教員として活躍している様子を見ることができ、彼らの在学当時のこと、特に初めて横浜国大に来て私の部屋を訪れた時の様子を懐かしく思い出します。このコースは、大学自らが政策的に留学生を受け入れる試みとして注目を集めて来ました。平成19年の文部科学省留学生特別プログラムへの再編に当たって、国費留学生の割り当て枠が10人に倍増したのはその実績が認められてのことであつたと思います。

次に私が取り組んだことに「横浜国立大学・インフラストラクチャー管理学修士課程コース」（平成7年度発足）があります。本コースは、世界銀行の奨学金を受けて発足したもので、私は設置準備委員会と運営委員会の委員を一貫して務め、その後、運営委員会の委員長を務めました。発足の2年ほど前に世界銀行の調査チームが来日し、文部省の庁舎で先に発足していた「横浜国立大学・計画建設学留学生特別コース」の実績を踏まえて、世銀チームに対して一所懸命に横浜国大の優位性を説明したことをよく覚えています。

勤務当時のことを振り返ると、22年間の横浜国大勤務期間は、多くの日本人、留学生の優秀な学生の皆さんに次々と出会うことができ、私にとって人生の最も幸福な時期の一つであつたと思います。どうもありがとうございました。今後の卒業生の皆様の益々の活躍を期待しています。

*SHIBAYAMA Tomoya, 特別会員（名誉教授）、水理研究室、横浜国立大学工学部土木工学科

国大土木に世話になり続けた30年

松丸 亮*

1986年3月に大学を卒業してから40年近くたちました。この間、卒業してからほぼ10年おき(1996年から2年間で博士前期課程、2007年からの3年間で博士後期課程)に大学に戻って勉強をさせてもらう機会を頂きました。3回も大学にお世話になっているのはたぶん同窓会員のなかでも珍しく、卒業後にも国大土木に最も世話になった一人かもしれません。

同窓会設立40周年の節目にあたって、記念誌を編むということです。卒業後の2回の学生生活を振り返ってみたいと思い筆を執ることにしました。

博士前期(修士)課程への入学を考えたのは、そろそろ中堅技術者として扱われるようになり、ある程度の仕事を任される立場となった時期でした。それまでの約10年間、主にJICAの開発調査や無償資金協力に開発コンサルタントとして従事してきて、少し仕事がマンネリ化していたところだったと記憶しています。卒論の指導教授だった大蔵先生に相談に行ったところ、「中村先生が途上国のことをやっているから中村先生に話をしてみたら」と中村先生を紹介していただき、中村先生の指導の下で修士の研究をすることになりました。1998年に前期課程を終えることができましたが、入試の時に土木棟の会議室で先生方全員が揃ったところで緊張しながら面接をしたのは、今でも鮮明に覚えています。

前期課程在学中の2年間は、休職をしての進学だったので、大学にいる時間も長く、学部から上がってきた同期とずいぶんと長い時間を過ごした記憶があります。勉強や研究だけでなく学会発表や旅行などにも一緒させてもらったことは良い思い出です。さらに、この時に博士後期課程に在籍していた留学生とは、その後、仕事を通した付き合いもあり、いまでも連絡を取り合っています。

前期課程を修了したあとも、開発コンサルタントを続けていたのですが、2005年1月から3か月ほどインド洋大津波(2004年12月)で甚大な被害を受けたバンダアチェに支援計画の立案のために派遣されていました。派遣期間中に柴山先生が津波調査に来られたので、休日などを利用し、調査のお手伝いをしたことが、博士後期課程に進むきっかけとなりました。

博士後期課程に在籍していた時期は、個人コンサルタントとして主に海外での仕事をしていたので、日本にいた間は比較的時間が自由に使い、前期課程の時と同様に、研究室に長い時間居ることができました。学部生、修士の学生や留学生と多くの時間を過ごし、若い学生や留学生と多くの話ができたのは、かけがえのない時間だったと思っています。

この2回の社会人学生経験から言えることは、学問的知識の習得や研究というのはもちろん重要ではあるけれども、それ以上に得たものは、仕事のつながりではない、学生というつながりであって、その点こそが、他では得がたいものであったということです。

ここまで書いてきたように、国大土木には大変世話になってきました。そのせいかどうかはわかりませんが、何かの縁が巡って、いま、同窓会の会長をしています。これも縁あって、現在は東洋大学国際学部国際地域学科で教員をしています。この学科には学科としての同窓会がありません。学科の卒業生が一堂に集まったり、後輩学生と交流をしたり情報を交換するする機会が無いのはとても寂しく思うところなので、同窓会の存在や活発な活動をしていることの良さを痛感しています。

会長としての力が及ばずなかなか同窓会活動を活性化することができずにいますが、他の理工系学科の同窓会と比べ、歴史が浅い土木同窓会も40年という時を経て、社会で活躍する人も多く輩出し、他の同窓会と遜色ない同窓会になっていると感じています。ここまで土木同窓会を引っ張ってこられた、先輩方や同窓会活動にご協力をいただいていた諸先生方に敬意を表したいと思います。

新型コロナウイルス感染症の拡大も落ち着き、対面での様々な活動が許されるようになってきています。土木同窓会がますますの成長と活性化をするために、微力ながら力を尽くしたいと考えています。

*MATSUMARU Ryo, 5期(1986.3卒), 計画研究室, 横浜国立大学工学部土木工学科

横浜国大同窓会 40 周年に想う

宮田 利雄*

土木教室の設立は 1978 (昭和 53) 年、文部省による大学の学科増の政策が進められていた頃の最後に、長い計画段階の末にやっと実を結んだものだった。2 年間の非常勤講師を務めた後、1980 年になって 4 つ目の講座が整えられたときに赴任することができた。小さな学科で 40 人の学生を抱えて大いに意気に燃えるとともに、弱小初発の悲しさ、苦しさを味わうことも少なくなかったとの思い出がある。

設立から 4 年後の 1982 (昭和 57) 年に初めての卒業生を送り出し、ここで国大同窓会が発足することになったが、学生諸氏の就職先の発掘がこの頃の苦労の一つだった。40 年を経た今の就職状況を詳しく知る由もないが、その後のかなりの期間は教職・研究室を介しての紹介・依頼等が主流で、皆の知縁、申し入れを中心に務めたものだった。今では想像もできないことだろうが、中にはひどい人事担当者がいて、「当社ではお宅のような大学からは採用しません」と大口をたたいていたのを思い出しもする。いろいろあった中で、お気に召さない就職先を

あてがわれ(?)悶々とその後の人生を送ってしまった、というような事例がないことを祈るばかりだ。

さて、同窓会の在り方についてもぐもぐと……。自身のことを振り返ってみて思うには、日頃はあまり意識することもなく、あつて当たり前で、運営していくには関係者のいろいろなご苦勞がしのばれるが、要は、各人各様の濃淡ある想いと行動様式を前提に、あまり上段に構えずに、しんなりと継続させることに意義ありとする、ことが重要かと思われる。適切に適宜に、何らかのイベントが考えられれば実施を試み、大海に勇み進んだままの者を引き付けておく方策に知恵を絞る、というところだろうか。

卒業して何年もたつと、その時の周辺、人とのつながりに気が向けられるのは避けられないものだろう。想定外の災害、諍いが続く中でも、古き時代の郷愁として大学時代の想いが入っているのであれば、人生、なかなか捨てたものでないと思えてくるだろうか。

*MIYATA Toshio, 1980 年 4 月—2004 年 3 月: 横浜国立大学教授, 2004 年 4 月: 同名誉教授

開発援助とバングラデシュ

吉原 俊治*

私は、1988年に土質研究室を修了し、当時のパシフィックコンサルタンツインターナル（PCI）に入社しました。PCIに就職したのは、①今井五郎先生から欧米のコンサルのステータスの高さを聞かされたこと、②4期の中村信也さんがPCIに入社して1年目から海外で仕事をしていて（会社の経費で海外旅行ができる）が大きな理由でした。私も、PCI入社後3か月でジャカルタに赴任することになり、2年近くジャカルタにいましたが、ちょっと遊びすぎたため国内に戻され、パシコン（PCKK）の構造部で6年間修業しました。その後PCIに戻り、PCIがオリエンタルコンサルタンツに移行するに伴い、移籍し現在に至ります。

来年で60歳になりますが、卒業以来、30年近く、海外業務（主に政府開発援助（ODA））に携わってきました。35歳くらいまでは、JICAの調査案件で出張ベース（1回の出張は長くて3か月くらい）の海外業務でしたが、36歳（1999年）から円借款事業に携わるようになり、長期赴任となりました。1999年からはベトナム・ハノイの環状道路3号線の南区間の詳細設計を担当し、2007年まで施工監理に従事しました。その後、2008年から同環状道路の南西区営9kmの連続高架橋の設計を統括し、2010年に一度日本に戻り、2013年からバングラデシュ（バングラ）に赴任して、国道1号線の3橋梁のリハビリ（2橋は1991年と1995年に日本の無償援助で建設された橋梁）と第2橋梁新設のプロジェクト（詳細設計・施工監理）を統括し、2020年1月に完工しました。タフな南国での8年間の勤務を終え、無事日本に帰れるかと思いきや、次の案件のTeam Leader（TL）が施主から交代を指示されていて、「吉原がTLやるならOK」という施主の言葉と、安易な会社の判断で、そのまま次の案件に移行することになってしまいました。ということで、現在は、バングラ・マタバリ新港アクセス道路建設プロジェクトの設計施工監理を統括しています。このプロジェクトは、バングラの南部に位置するマタバリ地区に新港を建設するため、その港への国道1号線からのアクセス道路（30km）を新設するものです。同地区には、慢性的な電力不足解消のために、日本による超々臨界圧石炭火力発電所も建設が進んでいます。

芸能人のローラさんやアベディンさんのおかげで、最近では、バングラデシュの認知度も上がっていると思いますが、インド西側のガンジス川下流の扇状地にある国土面積14.7万km²（日本の約1/3）に1億7千万人が住むとても人口密度の高い国です。国旗は日本の国旗によく似ていて、緑地に日の丸（中心がずれている）です。バングラデシュの独立を最初に認めたのが日本という事もあり、基本的に親日です。現在は後発開発途上国ですが、中所得国入りを目指して、数字上は経済成長が続いています。バングラは開発援助の宝庫です。1980年代から様々な国や機関が援助をしてきましたが、なかなか発展しませんでした。「援助の実験場」「援助の学校」ともいわれてきました。他の昔途上国であったインドネシア、タイ、フィリピン、ベトナムの発展を目のあたりにしてきた私もなぜバングラは発展しないのか？とずっと感じてきましたが、バングラで仕事をするようになり、その理由を肌で感じています。

私が一番思うのは、バングラがどういう国になりたいのか、そのためには何をするべきか？という明確な方針が未だ確立されていないことのように感じます。もちろん、バングラ自身だけの問題ではなく、余りにも数多くの援助が次々と注ぎ込まれるために、的を絞らせなくなっているというような援助する側の問題も多く存在しています。

- (1) なぜバングラデシュは援助されるのか？
- (2) なぜこれほど膨大な援助にもかかわらず、バングラは後発開発途上国のままなのか？
- (3) 様々なドナーの様々な実験から、バングラは私たちに何を教訓として与えてくれるのか？
これらをふまえて、今後、どのような課題に取り組まなければならないのか？

このような、バングラが私たちに何を投げかけているのかを、多くの事例をもとに検討・考察した『開発援助とバングラデシュ』（1998年アジア経済研究所）という書籍があります。ご一読いただければバングラのみならず、途上国の開発援助について理解が深まるものと思います。

<https://www.ide.go.jp/Japanese/Publish/Books/Syuryo/Keikyo/183.html>

*YOSHIHARA Shunji, 5期（1989.3 修），土質研究室，（株）オリエンタルコンサルタンツグローバル 技師長

土木同窓会創設当時の思い出

渡部 茂樹*

横浜国立大学土木工学科は1978年4月に創立されました。当時は大学としての入学式はなく、まだ土木工学棟もありませんでしたので、入学の当日、土木工学科の1期生は工学部講義棟の一室に集まりました。この時我々を迎えてくださったのが、井上孝先生と大蔵泉先生のお二人で、不安感いっぱいの我々を激励してくださったことを覚えています。

それから4年後、卒業を控えた1982年3月のある日の夕方、同期に召集がかかり、まだ真新しい土木工学棟の1階会議室に数名が集まりました。招集の議題は同窓会の設立で、同窓会を立ち上げるにはとりあえず同窓会会則を作らねばならないということで、他学科や他大学の同窓会会則から、最大公約数的に条項を組み合わせて作ったのが、土木同窓会会則の原型です。会長は、同期の中で年長の井上さんに決まりました。

1982年3月の第1期生の卒業式の後、土木同窓会発足式を行いました(写真)。当時30数名で発足した同窓会が、現在では1,800名を超える大所帯となっており、40年という時の流れを感じます。卒業時に記念植樹した木(写真)は、立派に成長していることと思います。

それから2年半ほど経ったある日、会長の井上さんから突然電話があり、海外に赴任するので、同窓会会長を引き継いでもらえないかという打診でした。私は地元自治体に勤めており、大学からも近いことから何とかなると比較的軽い気持ちで引き受けることにしました。それから、会長・副会長を20年勤め、その後も現在に至るまで同窓会に関わり続けています。その時は、これほど永く同窓会に関わることになるとは夢にも思っておりませんでした。

同窓会発足当時は、会員も少なく会計も厳しい状況でしたが、基金として三木五三郎先生から寄付をいただき、それ以降なんとか運営を持続することができました。

当初は、できるだけ大学側に迷惑をかけずに同窓会員の手で同窓会の運営を行おうという考えがあり、大学院に残った会員の方々にお手伝いいただきました。その頃お手伝いいただいた2期の片桐さん、風間さん、伊藤さん達には本当にお世話になりました。最初の頃

は同期会の延長のような感じで、会員も少なく名簿や総会の案内も何とかなりましたが、同窓会員が増えるに従い作業量も増大し、事務局の負担も大きくなりました。そこで1998年度から、大学側にも卒業生情報の収集体制の強化という位置づけで全面的にご協力をいただくことになり、体制を一新しました。併せて同窓会長も大学の先生にお願いすることになり、初代は合田先生に引き受けていただきました。2010年度までその体制が続き、ある程度運営が軌道に乗ったことから2011年度から会長を同窓会員とする体制に戻し、現在に至っています。

発足から40年が経過し会員数が増えるに従い、同窓会もそれに合わせた変革も必要になります。2019年度には、終身会費制度を創設しました。また、現在は学年幹事から成る役員会が年次計画を策定し、総会で承認する体制となっています。しかし、役員数も80名を越え役員会成立要件の過半数を確保することが難しくなっていることから、今後理事会制等の検討も必要かと思います。

私も2年前に定年退職を迎えました。退職すると、それまでの会社等のメールアドレスが使えなくなるなど、連絡がつかなくなるケースが増えることが予想されます。今後、退職する方が年々増えてきますので、学年幹事さん中心に同期の方の動向の把握、同窓会への情報提供を是非お願いします。

考えてみますと同窓会を立ち上げるというのは1期生だけにしかできない仕事ですので、その意味では本当に貴重な経験をさせていただいたと感じています。最初の頃は手探り状態で分からない事だらけでしたが、多くの会員の皆さんや先生方のご協力のおかげで40周年を迎えることができました。

同窓会は、会員全員の力で作り上げていくものだと思います。これからも同窓会の運営に多くの会員の皆さまのご協力を頂けるようお願いいたします。

*WATABE Shigeki, 1期(1982.3卒), 水理研究室, 横浜国立大学工学部土木工学科

あとがき

土木棟玄関の西側にある八重桜の幹の太さは 30 cm を超えました。40 年前，土木同窓会が創立記念として植えたときには 3 cm 程度の若木で，時間の流れが感じられます。その後，土木棟周辺には，卒業記念として，2 期生，3 期生が植樹しました。特に，3 期生は土木棟周辺に数多くの桜を植えて，いまでは花見のスポットとなっているようです。

これら桜は，土木棟で学んだ多くの学生を見送り，土木教室ならびに土木同窓会の動向や歴史を見守ってきました。今回，同窓会 40 周年の企画とした紀行文にも，創立当時の思い出や教室設立の経緯など，教室や同窓会としての重要な歴史が示されており，興味深く拝読いたしました。

今回の寄稿文集の編集にあたって，1 期生の元同窓会会長の渡部さんから同窓会創立当時の写真をいただきました。ありがとうございました。また，これらの写真を見ていて，同窓会の記録としての写真集や同窓会变遷などをまとめておくことの重要性も感じました。

最後になりましたが，本企画を進めるにあたって後押しいただいた松丸会長をはじめとした同窓会運営会メンバー，お忙しい中ご執筆いただいた会員の皆様に感謝いたします。

（片桐雅明：2 期生）



1984 年ごろの土木棟周辺（3 期生が植えた桜の若木が確認できる）